

## ■ 研究所だより

榎本 木綿

9月19日、東京・明治公園。この日の光景をきっと多くの人たちがいつまでも記憶するのだと思います。酷暑の名残りを見せつけるようにごりごりと照りつける太陽のもと、「さようなら原発 5万人集会」に参加しようと6万人もの人びとが一堂に会しました。多くの矛盾と危険をはらんだ原発を順次廃止・中止して、再生可能・自然エネルギーへの政策シフトを求めようと、デモに参加した市民の数は当初の予想を大きく上回りました。新しい日本社会を安全でたしかなものにしようと、市民が自分たちの意思を表明した瞬間でした。

当日、私はボランティアスタッフとして道案内に立っていましたが、いつもの集会やデモとは明らかに様子が異なり、高齢の

方、家族連れ、友人同士、若いカップルなど、たくさんの「ふつう」の人たちが続々と到着してきました。開始前にはすでに園内はひしめき合い、周辺には入りきれなかった人たちで溢れ返りました。口々に、「個人参加なんだけど、どこにいけばいいの?」、「一般の集合場所は?」と、集会に不慣れな様子で尋ねられ、特にベビーカーを押した子ども連れの若いファミリーが多かったのが印象的でした。子どものいのちと未来を守りたいという想いがアクションへと突き動かしたのかもしれない。

いま、各地でお母さんたちが中心となり、子どもの健康を守るため、校内の放射線量の測定や除染作業が始まっています。もちろんお母さんたちだけでなく、汚染度の高



い地域では町内会などが中心となり住民が休日に除染活動を行う地域も増えてきました。対応が後手に回る政府への批判に留まらず、自分たちが住む地域で暮らし続けるための道を地域住民自らが模索し始めています。

東電や国による迅速な補償は当然です。しかしそれとは別に、これまでのように安全や安心な暮らしを公共のサービスを通じ提供されることを待ち続ける時代は終わったように思うのは私だけでしょうか？安全で豊かな新しい社会を創ろうとたくさんの方が口にしますが、いったい私たちはどのような社会を望んでいるのか。それを考え、そのための行動を起こし、より良いほうへ社会を変えていくことから始めなければ、政治を始めこれまで他人任せでできた私たち有権者のツケともいえる第二、第三の福島原発のような大惨事が起き

る可能性は否定できません。福島原発事故で私たちは間違いなく当事者であり、被害者であり、その一方で、間接的であれ、無関心という点では加害者でもあったのではないのでしょうか？

新しい社会を、たしかな暮らしを創るために、まずは地域に生活する人たちが自分たちで地域を治めていく。市民自治の原点であり、課題を解決するための話し合いの過程から自分たちの望む社会が具体的に見えてくるはずです。この大きな危機を契機に、私たちはもう一度自分たちが暮らす地域から社会を再生させることで、新しい日本社会を一つひとつ創り上げていくのだと思います。

あの日、多くの人たちが味わった想いを風化させることなく、実現させることを目指し、東北の人たちと想いを共にして、これからも行動し続けていこうと思います。

〈今月の楠野晋一さんの「東北復興現地レポート」は休載いたします〉

## 新入会員 (2011.9.1～9.30)

個人会員(敬称略)

コミュニティ・公共とは?)

工藤 牧子(労協センター事業団、関心：若者自立就労、障がい者就労、コ

学生・障がい者(敬称略)

望月 ブダイ(和光大学、関心：協同組合)

## 研究所活動日誌 (2011.9.1～9.30)

09/01-02(木-金) センター事業団全国所長会議

地主会連合会 比嘉宏仁氏訪問(那覇市・管、古谷、榎本)／クライ

09/06(火) 第1回講座・訓練事業推進会議(細越)

ブ林産企業組合 佐藤克彦氏訪問(名護市・佐藤氏、池田氏、管、

09/07(水) 全国「よい仕事」研究交流集会第3回実行委員会／沖縄県軍用地等

古谷、榎本)

09/08(木) 多田欣一町長訪問(岩手県住田